

# 白河街区跡・岡崎遺跡

2005年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 白河街区跡・岡崎遺跡

2005年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は、今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じ広く公開することで、市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用を図っていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ規模の違いはありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できるとなります。

このたび配水管布設工事に伴う白河街区跡・岡崎遺跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

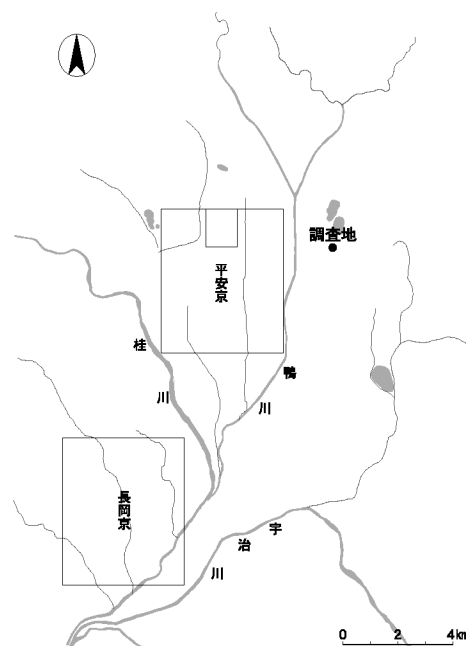
平成17年12月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 白河街区跡・岡崎遺跡
- 2 調査所在地 京都市左京区岡崎南御所町（岡崎通西側車道部分）
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市公営企業管理者 上下水道局長 吉村憲次
- 4 調査期間 2005年7月19日～2005年9月21日
- 5 調査面積 76m<sup>2</sup>
- 6 調査担当者 吉村正親
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「岡崎」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 挿図の順に通し番号を付した。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 15 基準点測量 宮原健吾
- 16 本書作成 吉村正親
- 17 編集・調整 児玉光世
- 18 本書は、2001年度から発刊してきた『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報』を、今年度より書名変更したものである。



（調査地点図）

# 目 次

1. 調査経過	1
2. 遺 構	1
3. 遺 物	7
4. ま と め	9

# 図 版 目 次

図版 1	遺構	1	A区T1全景(北から)
		2	A区T2全景(北から)
		3	B区T1全景(北から)
		4	B区T2全景(北から)
図版 2	遺構	1	C区T1全景(北から)
		2	C区T2全景(北から)
		3	C区T2土壌1
		4	C区T3全景(北から)

# 挿 図 目 次

図 1	調査前全景(南から)	1
図 2	C区T1調査風景(南から)	1
図 3	調査位置図(1:2,000)	2
図 4	A区遺構実測図(1:100)	4
図 5	B区遺構実測図(1:100)	5
図 6	C区遺構実測図(1:100)	6
図 7	C区土壌1・4出土土器拓影・実測図(1:4)	7
図 8	B・C区攪乱出土遺物拓影・実測図(1:4)	8

# 表 目 次

表 1	遺構概要表 .....	3
表 2	遺物概要表 .....	8

# 白河街区跡・岡崎遺跡

## 1．調査経過

調査地は、京都市左京区岡崎南御所町内の通称岡崎道と呼ばれる南北方向の道路である。その内の冷泉通から二条通に挟まれた車道部分の西半部分にあたる。

調査は配水管の布設工事に伴うもので、旧管部分に布設するものと新規に布設する部分があったことから、京都市埋蔵文化財調査センターの指導により、新規部分についてのみ調査を実施することになった。

遺跡は、白河街区跡内、法勝寺と最勝寺の間の街路と想定されている。さらに下層には、岡崎遺跡（弥生時代から古墳時代）が広がっているとされている。

上下水道局の同様の工事に伴う調査は、岡崎通の東側歩道と二条通動物園北側歩道でも先年度に実施し、一定の成果を上げている。調査は道路通行上の制約があつて、全線をA区・B区・C区の3区に区切って行い、土を場内に仮置くため、さらに各区を2～3箇所に分割して調査を進めることとした。

## 2．遺 構

トレンチは南北に長く、その上、全区に共通していたが、中央部に南北方向の古い水道管が入り地山まで攪乱を受けていた。故に全調査区に於いて調査すべき部分が狭くなり、そのため観察が制約を受けた。

A区（図4、図版1）

基本層序は、厚さ32cmのアスファルト、20cmの盛土、18cmの水田耕作土、10cmの整地層、以下浅黄色砂層の地山の順になっていた。

T1は8m×1.4mのトレンチを設定した。北東隅に現代攪乱、中央部に円形素掘りの土壌13が



図1 調査前全景（南から）



図2 C区T1調査風景（南から）

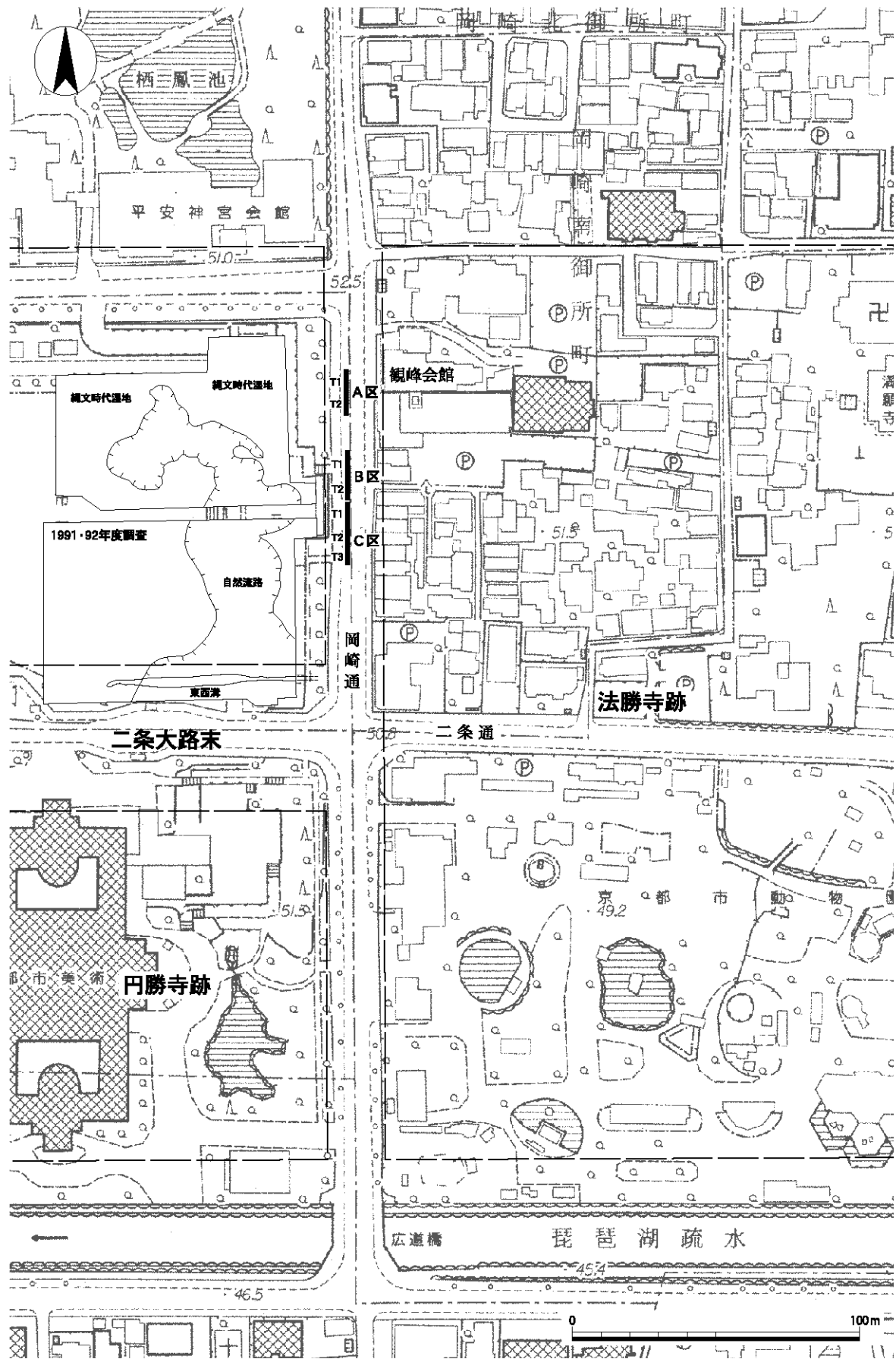


図3 調査位置図 (1 : 2,000)



ある。続いて土壌14も円形素掘りで、近代の遺物が出土した。この2つは、いずれも近代の野井戸であると思われる。

T2は8m×1.4mのトレンチを設定した。溝11は幅1.5m、深さ0.3mあって、東西に延びていると思われるが、攪乱によって大きく切られているため明確ではない。断面で見ると限り水田耕作土の下に成立しているため、近代以前の時期と思われる。溝11を切る土壌12は近代のものである。

B区（図5、図版1）

基本層序は、アスファルト30cm、盛土20cm、水田耕作土10cm、床土10cm、地山となっている。

T1は南北9.8m×幅1.4mのトレンチとなった。北から3mの所に深さ0.5mでガス管が出現したので幅約0.8mを残すことにした。ここに土壌10（野井戸）があり、中に20～25cm大の丸石が多く入っていた。これは石積みの井戸が壊れたものと思われる。土壌9も近代の野井戸である。

T2は南北7m×幅1.4mのトレンチである。南端部でガス管2本分が確認されたので、幅約1mを残して掘り下げた。その結果、北から近代の土壌6・土壌7・土壌8・土壌5と4基の円形土壌が続いた。その内の土壌6は、土壌7によって切られていた。また、近代の土壌5は、上層から攪乱によって掘り込まれ下層のみ残っていた性格不明のものである。

C区（図6、図版2）

基本層序は、アスファルト30cm、盛土40cm、水田耕作土12cm、床土25cm、地山の順になっていた。東西方向にガス管が2箇所あったので、トレンチは3箇所とした。

T1は南北9.5m×幅1.4mあり、南端部では幅1.2mと狭くなってしまった。中央部に土壌4があつて人為的に石や黒色砂泥で埋められていた。底部に桶の底板が残っていたが、遺物は出土していない。その形状から近代の肥溜めではないかと思われる。しかし、黒色砂泥には弥生時代末期から古墳時代初頭の土器が混入していた。

T2は南北8.2m×幅1.2mとしたが、南端部では幅1.1mと、さらに狭くなるトレンチとなった。大部分は攪乱を受けており、残った部分を精査すると、水田耕作土の下に小溝2が東西方向に検出できた。中央部には大きさ30cmの石や黒色砂泥で埋まった土壌1（幅2.4m、深さ0.3m）があり、弥生時代末期から古墳時代初頭の土器を検出した。

T3は南北3m×幅1.1mの小さなトレンチとなった。中央部の古い水道管を除くと、わずか幅0.2mの水田耕作土が残るのみとなり、大部分が攪乱されていた。

表1 遺構概要表

時代	遺構		
	A区	B区	C区
弥生時代末期 ～古墳時代初頭			土壌1
近代	溝11、土壌12～14	土壌5～10	溝2、土壌4

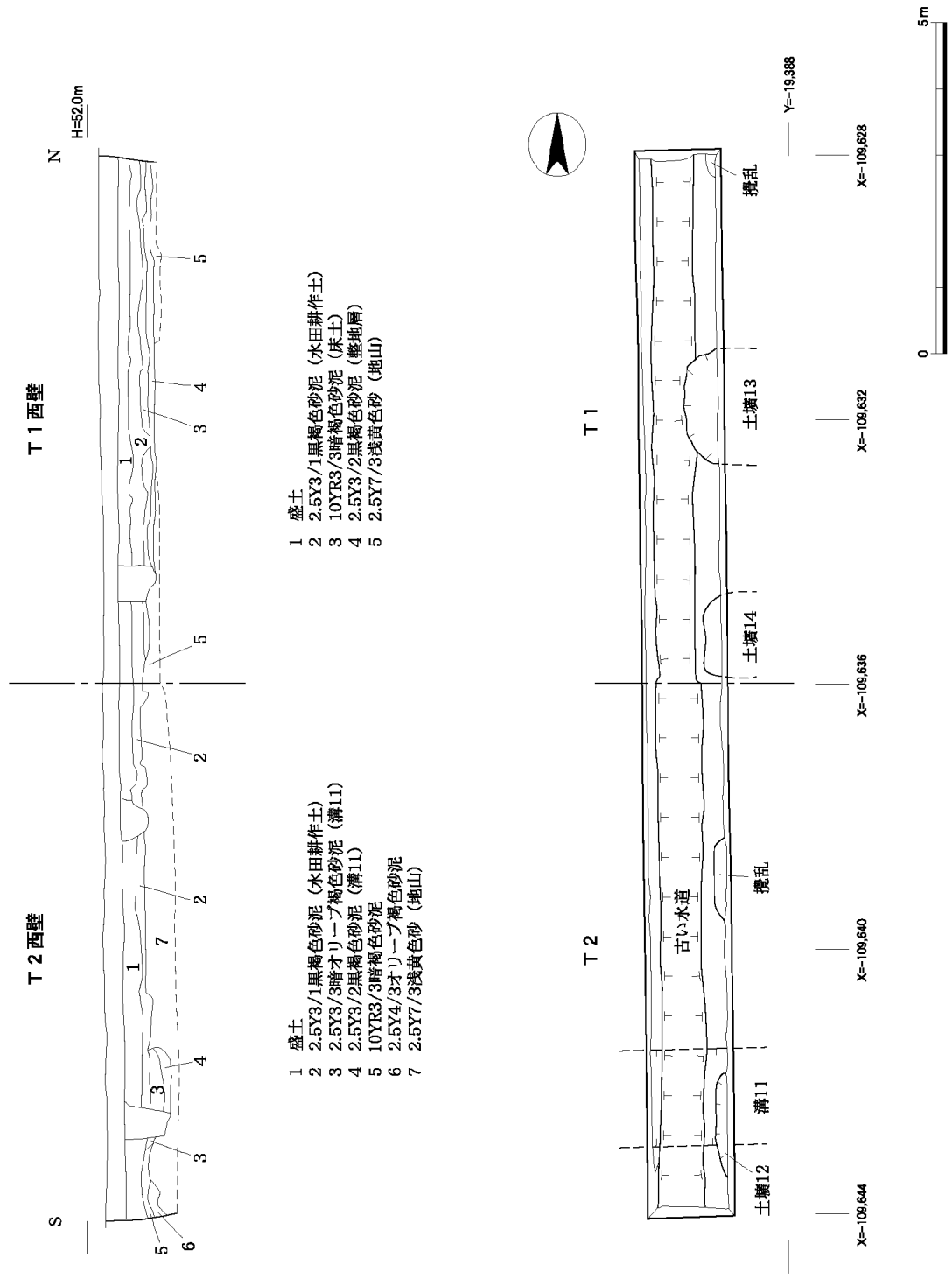
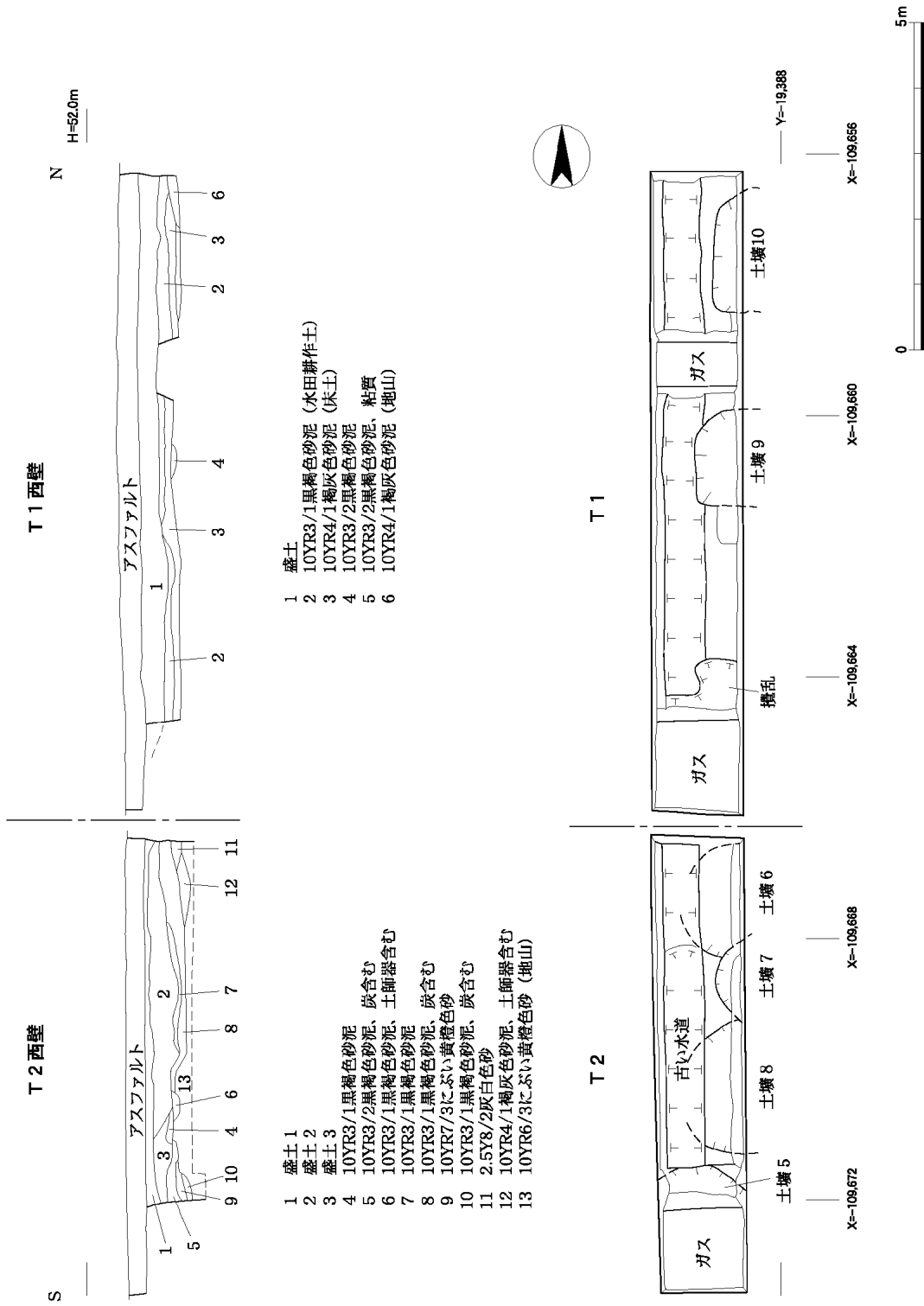


図 4 A区遺構実測図 (1:100)



- 1 盛土
- 2 10YR3/1黒褐色砂泥 (水田耕作土)
- 3 10YR4/1褐灰色砂泥 (床土)
- 4 10YR3/2黒褐色砂泥
- 5 10YR3/1黒褐色砂泥、粘質
- 6 10YR4/1褐灰色砂泥 (地山)

- 1 盛土 1
- 2 盛土 2
- 3 盛土 3
- 4 10YR3/1黒褐色砂泥
- 5 10YR3/2黒褐色砂泥、炭含む
- 6 10YR3/1黒褐色砂泥、土師器含む
- 7 10YR3/1黒褐色砂泥
- 8 10YR3/1黒褐色砂泥、炭含む
- 9 10YR7/3にぶい黄褐色砂
- 10 10YR3/1黒褐色砂泥、炭含む
- 11 2.5Y8/2灰白色砂
- 12 10YR4/1褐灰色砂泥、土師器含む
- 13 10YR6/3にぶい黄褐色砂 (地山)

図 5 B 区 遺 跡 地 質 図 ( 1 : 100 )

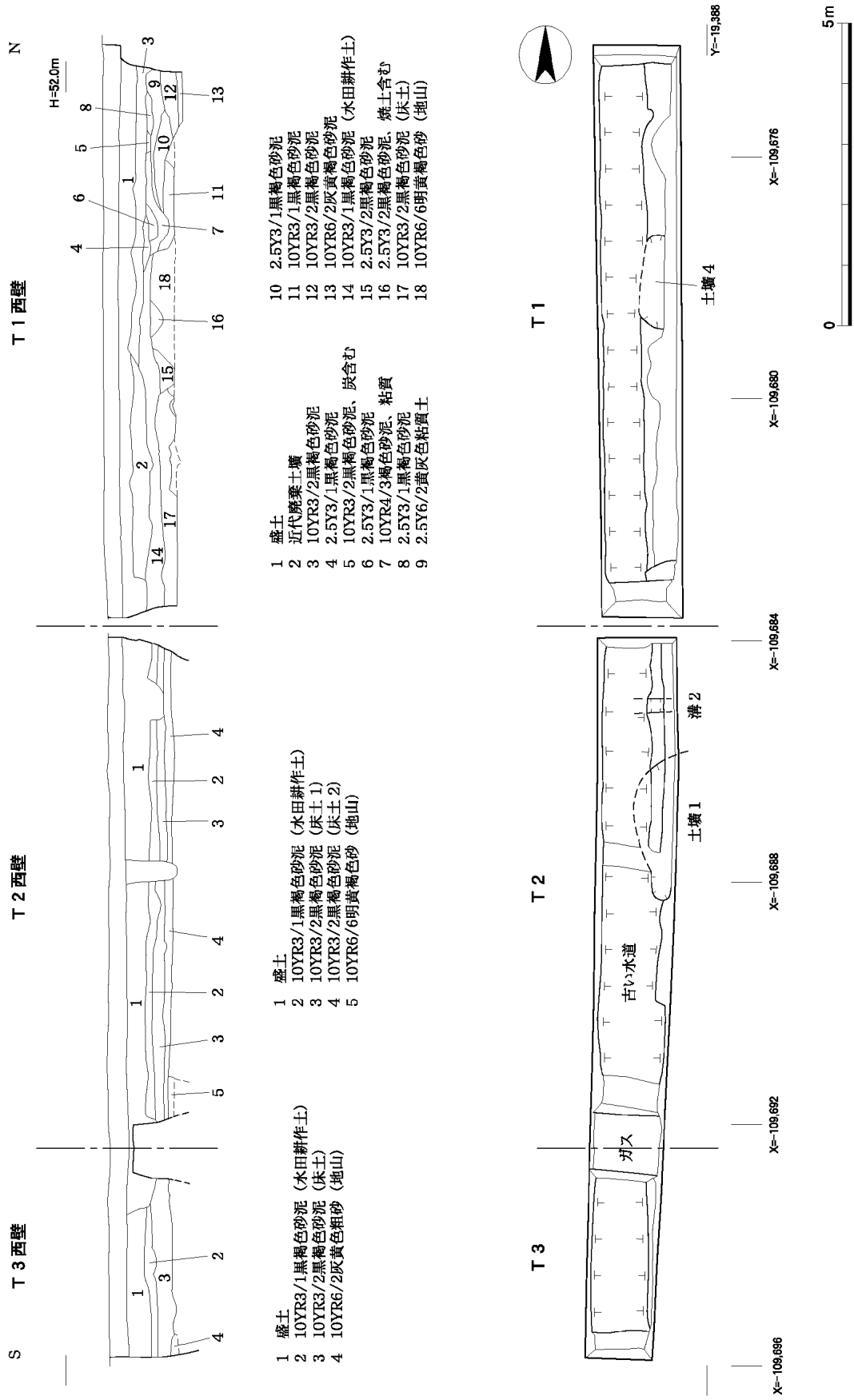


図6 C区調査地断面図(1:100)

### 3. 遺物

今回の調査では、弥生時代から古墳時代、平安時代、江戸時代から近代の各時代の遺物が出土した。量的に多いのは、近代の遺物と平安時代の瓦類である。ほとんどの遺物は、古い水道管の埋め土の中より出土した。瓦類もこの中に混入していたもので、近代の遺物と共伴しており原位置を保っていなかった。ただし、土壌1出土の土器は、混入が認められない良好な一括遺物といえる。

弥生時代末期から古墳時代初頭（図7 - 1 ~ 13）

1 ~ 13は庄内式併行期の土器で、1 ~ 9は土壌1から出土、10 ~ 12は土壌4上面より出土、13は土壌1と土壌4の土器が接合したものである。

器台（1） 口縁部は貼り付けで垂下し、上面端面に刻目文、外面に擬凹線文を施す。

甕（2） 受け口状口縁をもち、外面頸部以下と内面口縁部以下に八ケ調整を施す。

高杯（3） 外反する杯部が途中で内に曲がるもので、杯部内面は全面ヘラミガキである。

高杯（4） 杯部は緩やかに深く曲線を描きながら脚部に取り付く。脚には三方透かしがあり、内側に絞り目が残る。脚部上面を円形に造り、そこから杯部を立ち上げて行く技法である。

甕（5） 条痕文土器と思われる小片である。

甕（6） 暗褐色をした土器で、外面はタタキメ、内面はヘラケズリしている。

甕（7） 外面を平行タタキして、内面は八ケ調整している。

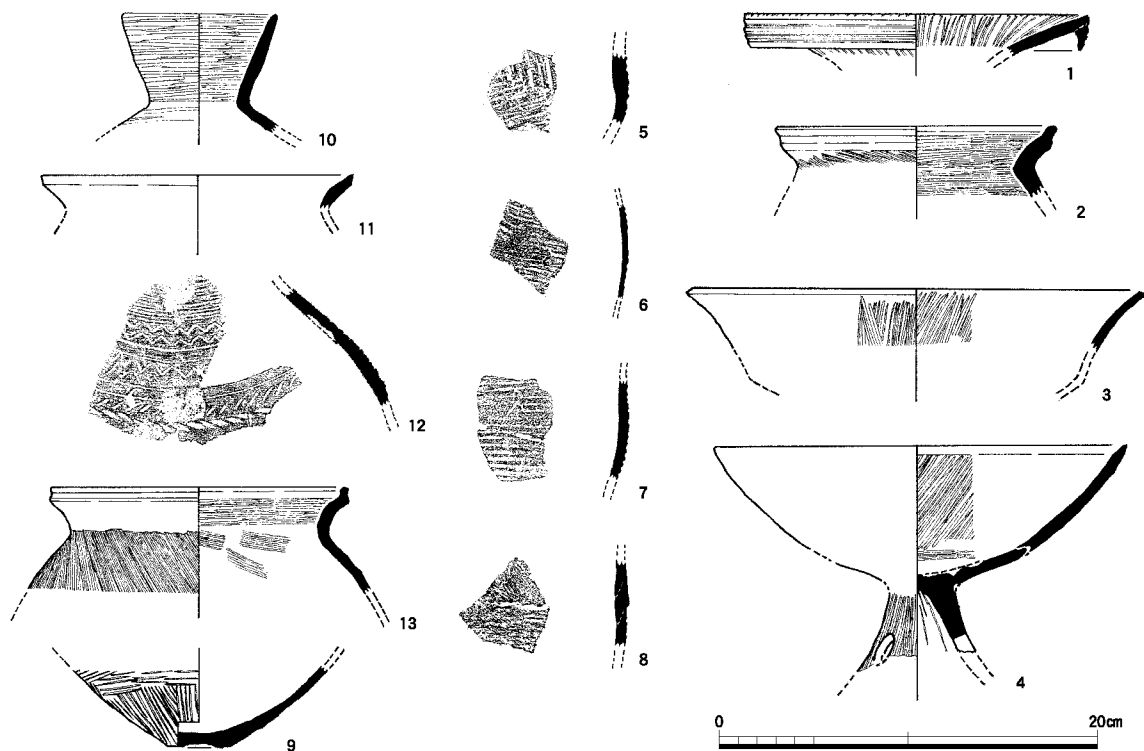


図7 C区土壌1・4出土土器拓影・実測図（1：4）

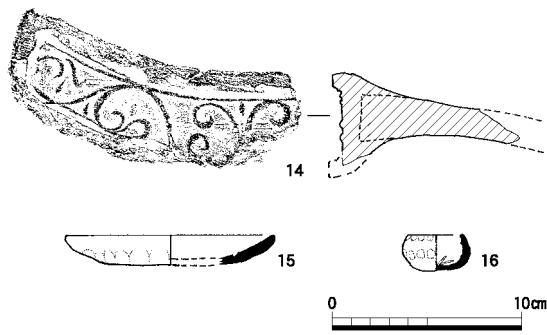


図8 B・C区攪乱出土遺物拓影・実測図(1:4)

甕(8) 外面下方を平行タタキし、上方はハケ調整している。粘土紐巻き上げ技法の痕跡が見られる。

甕(9) いわゆるドーナツ底(もしくは上げ底)で、外面には全面タタキが見られる。

直口壺(10) 口縁近くでやや内湾して立ち上がるもので、口縁部の内外面に横方向のヘラミガキを施す。

甕(11) 口縁部付近の小片で、外面にススが付着し、内面に横方向のハケメが見られる。

壺(12) 体部上半部のみ破片である。上部に多条の櫛描直線文と2条の波状文、2条の直線文、2条の波状文、2条の直線文、横方向の綾杉文となっている。下半部には丹塗が見られ、いわゆるパレススタイル<sup>2)</sup>の影響を受けている。

甕(13) 受け口状口縁の甕。口縁部上端付近で角度を変えて直立気味に立ち上がり、受け口状口縁を持つ。外面の頸部より下は細いハケ調整、内面は粗い斜めのハケメである。この土器は土壌1と土壌4上面の破片が接合したもので、土壌1の土と共に移動したと推察する。

平安時代後期(図8-14)

均整唐草文軒平瓦(14) 東播磨地方で生産された包み込み式の瓦で、須恵質に焼けて非常に堅い。B区T2攪乱より出土した。

近世~近代(図8-15・16)

土師器皿(15) 江戸時代の見込みに凹線を入れる皿の小片である。C区T2攪乱より出土した。

土師器小壺(つぼつぼ<sup>3)</sup>)(16) 丸くて小さな土器で外面に指紋が残る。内はヘラで成形するのであろう。B区T2攪乱より出土した。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代末~古墳時代初頭	庄内式併行期土器		庄内式併行期土器13点		
平安時代後期	瓦		軒平瓦1点		
江戸時代~近代	土師器、陶器、磁器、金属製品		土師器2点		
合計		6箱	16点(1箱)	0箱	5箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

## 4.まとめ

今回の調査は、全トレンチの中央部を古い水道管が貫き遺構面を破壊していたため、限られた部分の調査になってしまった。その結果、六勝寺に係る遺構は残っていなかったが、岡崎遺跡の遺構を検出し、江戸時代の土地利用についての知見を得ることができた。また、六勝寺関係の多数の瓦類を採集できたことは、周辺に遺構が存在する事を示唆していると言えよう。

近辺の調査は、A区の東側、観峰会館の西側の歩道上で上水道工事に伴う調査を実施したが、近代の攪乱が多く、法勝寺跡<sup>4)</sup>関係の遺構の確認はできなかった。しかし、西隣の岡崎グラウンド<sup>5)</sup>の調査で、最勝寺跡をグラウンドの西部に求めるべきであるとした新しい見解を出した点は重要である。さらに、岡崎遺跡<sup>6)</sup>に伴う流路の存在を岡崎通の西で明らかにした。今回の調査地区には湿地状堆積がなかった事で、流路の東岸であることが確認できた。また、遺跡の性格の一端を示す遺物として、東海地方で認められるパレススタイル土器の影響を強く写す壺(12)などは、山背と東海地方との交流を示す資料である。

### 註

- 1) 円勝寺発掘調査団編「円勝寺の発掘調査」上『仏教芸術』82 毎日新聞 1971年
- 2) 「パレススタイル」東海地方を中心に分布する土器で、大参義一が定義。口縁部の形態が複雑で、口縁端を幅広くとり、ボタン状突起あるいは棒状浮文を加え、胴上半部、口縁部内面に櫛描きの横線文、波状文、列点文などを施した上、それ以外の部分を丹によって塗りわけると。  
加納俊介・石黒立人『弥生土器の様式と編年 - 東海編 - 』木耳社 2002年
- 3) 17世紀前半から19世紀までのゴミ穴・井戸・溝から出土し、18世紀中頃から出土数が増加する。  
堀内寛昭「つぼつぼ考」『茶道誌淡交』603第49巻第12号 淡交社 1995年  
堀内寛昭「土製小壺と茶の湯の“つぼつぼ”」『第102回京都市考古資料館文化財講座資料』1997年
- 4) 法勝寺跡(寺院跡) 平安時代後期から鎌倉時代。六勝寺跡の中でも国王の氏寺とよばれた筆頭寺院。白河天皇御願寺。承暦元年(1077)落慶供養。発掘調査により金堂跡・金堂に取り付く翼廊・池汀跡などが見ついている。  
『京都市遺跡地図台帳』平成15年3月 京都市文化市民局
- 5) 内田好昭・丸川義広・平方幸雄「最勝寺跡・岡崎遺跡」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 6) 岡崎遺跡(集落跡) 弥生時代から古墳時代にまたがり、六勝寺跡を中心に広がる遺跡。方形周溝墓・竪穴住居跡・旧河川跡が検出されている。  
『京都市遺跡地図台帳』平成15年3月 京都市文化市民局

# 圖 版



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	しらかわがいくあと・おかざきいせき							
書名	白河街区跡・岡崎遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2005-9							
編著者名	吉村正親							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2005年12月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しらかわがいくあと・ 白河街区跡・ おかざきいせき 岡崎遺跡	きょうとしききょうく 京都市左京区 おかざきみなみごしよちょう 岡崎南御所町	26100	417 418	35度 00分 40秒	135度 47分 15秒	2005年7月 19日～2005 年9月21日	76m <sup>2</sup>	配水管 布設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
岡崎遺跡	集落跡	弥生時代末期～ 古墳時代初頭	土壌	庄内式併行期土器				
白河街区跡	寺院跡 邸宅跡	平安時代後期		瓦				
		江戸時代		土師器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-9

## 白河街区跡・岡崎遺跡

発行日 2005年12月28日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 075-256-0961